

3-3 ウエペケレ「テックプ ウシ ヘカチ」解説

語り：貝澤とうるしの
聞き手・解説：萱野茂

萱野：私は一人のアイヌでありました。家内と共に何不自由なく生活をしておったんですけども、たった一つ不自由なのは、子供がなくて、それだけが不自由だ、寂しい。

そしておるときに、あるいつ頃からかよく分からないんだけど、一人の子供が村の中出たり入ったりしておる時に、段々その子供が自分のうちへ近づき、そして家内も共に大切に育てておった。

それが、12～3歳、14～5歳となっても何かたまたま仕事なんかも手伝わせるようになって、楽しく生活をしておったのに、いつの間にかその子供がヒョイと見えなくなってしまった。17～8になって、ようやくこれから本当にクマ狩りなんかでも一緒に歩けると、楽しんでおったのに、その私アイヌ自身も本当に寂しくって、それ以上に家内の方も寂しがって、共に何日も泣いたりしたんだけど全然行き先も分からない。だからと言って、探すあてもないしそのままにして過ごした。

ある日のこと、ふと山へ行きたくなかったので、いつものように弓とか矢とかそうしたものを一抱え背中に背負（しょ）って、一地根越えて、次の方の川へ下りて行った。そしたらずっと向こうの方の台地のような丘のような所を下っていくと、向こうの方に見える木の上にカラスが二羽止まって、何かその木の上から下でいる者へスッと舞い降りると、下でいる何者か知らないけれども、棒か何かで振り回して、そのカラスが逃げるような仕草をしているので、すぐに段々近寄って行って、いったい何がいて、そんな事をしておるんだらうと、こっそり立木の陰から忍んで寄って行って見た。

そうすると、見えなくなって、あんなに皆で悲しんでおった子供が、もう大分いい体付きにもなって、それが木の下にいた。

それには大きな、人間……、形も体も人間なのに大きな羽根が付いておると。だからその羽根を見ただけでも、本当に恐ろしい感じもする。異様な感じもする。

それでカラスがこう舞い降りると、そのカラスに向かって何か羽根をパタパタすると、カラスが舞い上がるということが続けておった。

しかし、声を掛けるのも恐ろしいので、だまって立木の陰から見ておると、うちで育てたことのあったあの子供が、であり、そして今では羽根が生えているその子供が何となく恐ろしい姿、恐ろしい顔付きそのまま、ヒュッと立って、普通の鳥の飛ぶように、飛び立ってずっと山を越えて向こうへ行ってしまった。

それを見てから、恐ろしさのあまり、本当に大急ぎで我が家へ帰って、その話なんかをうちでした。その晩の夢に、夢枕にその子供が、元あった時と同じような形で立っても、向こう側へ向いて、私の方へ振り向きもせず、体を向こうへ向けて、言うのには「大切に育てられておった時は、本当に楽しい生活であったのに、何か獵をするとするんで、山へ行っ、そして行くと、そのアイヌ語では **kenas unarpe** と行って、湿地帯に住む悪魔ばあさんと言いましょか。そういうばあさんがおって、『お前はよく来たな。お前はアイヌのところで生活する人間でないんだと。生まれながらに化物として生まれたのだから、化物の仲間入りするんだぞ、と。だから決して前の村へ帰ってはいけませんよ』と。そういふうに言われた途端に何か身も心も体も重くなってしまった、と。そういう状態になって、そのままにしていると、ニョキニョキとその羽根も生えてきた。そして、そのままこういう姿になっておったのに、私を大切に育ててくれた **nispa** [長者] が、そうやって私を見たら、本当に今からもう帰ることも出来ませんし、私のことはどうぞ忘れて泣かずに生活をして下さい。その代わりに遠い村で非常に精神のいい若夫婦がおるから、私の考え方によって、あなたの所へ来て、あなたの息子として生活出来るようにしますから、どうぞあまり泣かずに生活して下さい。」

それを言われたんで、ああそうであったかと、生まれながらにそういういわば化物として生まれたんであれば、仕方がない、と。それを諦めておるところへ、まあ、夢に見た通りに若い二人が来て、そして私の所へ住みつき、子供も生まれ、大切に仲良く生活出来て私も年を取って、所謂もう死ぬに近いんだ、と。

だからこれからの人たちは、その、氏素性の知らないそういう子供が来ても、決して軽はずみに泊めたり、養ったりするという事も恐ろしいものだから、素行の分からない者は、あまり寄せ付けるものでないよ、と言って一人の男が死んだ。

これは **uepeker** [散文説話] でした。

貝澤：aynu uepeker [人間の散文説話]

萱野 : aynu uepeker ですね。これは、どういうふうに言ったんだっけ？ kup kor

貝澤 : tekkup kor [羽のある]。tekkup us kane [羽の生えた]。tekkup us wa して [羽が生えて] こういう…

萱野 : tekkup us hekaci [羽の生えた少年] だな。

貝澤 : うん。tekkup us hekaci [羽の生えた少年]。cikap kasuno poro tekkup aynu ne p ora us wa ani hopuni [鳥よりも大きな羽が、人間であったものに生えて、それで飛んで行った] って。

萱野 : tekkup, tekkup [羽、羽が]

貝澤 : tekkup us [羽が生えた]

萱野 : hekaci [少年]